# TSTにあらわれた反応の心理的負荷について

高　垣　忠　一　郎

## I　問題と目的

人が自分をどのように感じ，認知し，評価しているかは，自己像，自己概念，自己態度，自己評価，等々のコトバで呼ばれ，研究者によって多少その意味するところは異にするが，いずれも人の「内的照準枠」としてその人の行動に影響することはひろく認められている。臨床心理学の分野では，Rogers ら以下の一連の自己概念に関する研究が，自己概念と適応ー不適応を明らかにしてきている。

ところで，そうした一連の研究の中で広く用いられてきた方法は，Q分類法にしろ，評定尺度法にしろ，予め理論的に構成された一連の質問あるいは項目を，一定の基準にしたがって分類あるいは評定するものであった。これらの方法は，実験者の予めもっている理論的枠組にしたがって項目を構成しているゆえに，実験者のねらう自己概念の諸側面を確実に得ることができることや，数量的な処理を中心とする結果の整理の方法も比較的容易であるという利点をもっている。

しかしながら，研究者によって予め設定された項目に対して強制的に評定あるいは分類させる場合，それぞれの項目が，どれだけ各被験者が日頃親しんでいる自分についての実感に相応するものであるか，その程度に色々ちがいがあるだろう。こうしたちがいを無視して，結果を一律に数量的に処理することは，これまでにも疑問が呈されてきている。特に臨床的な研究においては，この点の解決が重要な課題となる。

このような質問紙法なり評定尺度法の弱点を克服し，しかも一定の枠組をもち，結果の数量的な処理が可能である方法，「できるだけ自身のコトバで自由に語らせ，しかも一定の枠組におさめることができるような方法」(星野1958) として，Kuhn, M (1954) らによって開発され，星野 (1958) によって日本に紹介された "Twenty Statements" Test (略称 TST) があげられる。

この測定法は「私は誰だろうか (Who Am I)」という問に対して，思いつくものを，順次20個の短文として自由に記述させる方法である。その意味で，これは簡便でしかも広い応用可能性をはらむテストであると考えられるが，なお開発途上にあり，その効用はいまだ充分には検証されてはいない。とはいえ，それが「パーソナリティを社会構造との関連においてとらえようとする試み，個人の行動を現象学的に把握しようという臨床研究にとって一つの可能性をはらんだ方法であるとはいえる」(国際基督教大学教育学研究所教育心理研究室編「二十答法による自己態度の研究手引」1961) とは，筆者も又同感である。

例えば，臨床的な研究への応用を考える場合，従来の質問紙法や評定法よりも，自由で自発的な自己陳述を得られる点では，実際の臨床場面でのクライエントの自己陳述により近いものが得られるだろう。そういう意味で当人の実感により近い自己概念の構造を工夫次第では簡便につかみうるよき方法となる可能性があると思われる。

そもそもTSTの創始者であるKuhnらは，最初これによって被験者の自己概念とその集団所属あるいは文化的背景との関係を探索した(Kuhn, M. et al 1954). 彼らは，あらわれた記述を内容によって，社会的集団や社会的役割などの背景に自己を関係づけた記述で，その帰属が客観的に証明できるような記述(Consensual response" と呼ぶ)と，個人の性格や能力，関心，願望などのより主観的な色合の濃い記述("Non-Consensual response あるいは "Subconsensual response" と呼ぶ) とに大別し，Consensual な記述から Non-consensual な記述への転換点がどこにあるか(一般に Consensual な記述が先に出現し，ある点から Non-consensual な記述に転換することがすでに明らかにされている) の分析から，個人の集団準拠性ないし社会的繋留の程度を比較検討している。社会心理学的な観点から，このような，集団所属のちがい，社会文化的背景のちがいによって Consensual response と Non-consensual response のあらわれ方がどうちがうかといった研究が今日まで続いてきている一方，例えば，西村(1964)，菊池(1970) の研究にみられるように，記述の心理的な意味，心理的な負荷を明らかにする試みがなされている。特に臨床的研究への応用をはかるためには，今後さらにこのような記述の心理的な意味を明らかにしてゆく研究の積みあげが必要と考えられる。

本研究では，西村・菊池らの研究をひきつぎ，TSTにおける記述のもつ心理的意味についてさらに探索する。すなわち具体的には，TSTにあらわれる自己の諸側面の記述は日頃の行動にどの程度影響しているものか，しばしば意識されるものか，ほとんど意識されないものか，自己のアイデンティティの構成に深くかかわるものか，かかわらないものか，そうでありつづけたいと肯定されるものか，そうでありたくないと否定されるものか，等の点について探索することを目的とする。

## II　方　　法

### 1　テスト用紙

本研究で用いたテスト用紙は，2枚の用紙からなり，1枚目には上部に「下の1から20までのそれぞれの線の上に『私は誰だろうか』という問に対して，頭に浮んできたことを，20通りのちがった文章にまとめて下さい。この質問は，あなたが自身に問いかけているもので，他の人からの，あるいは他の人への問ではありません。そのつもりで頭に浮んできた順にりくつや大切さをぬきにして，1から20までの空欄に一つずつ違ったことを書いて下さい。時間が限られているので，『はじめ』のあいずがあったら，なるべく手ばやくかたづけて下さい。質問があったら手をあげて係の人がそばへ来てからして下さい。いったん書いた文字を消すには，消しゴムを使わず鉛筆

で文字の上に2・3本横線を引くだけでよろしい。」の教示が書かれており，その下に1から20までの番号をうった横線がひかれてある。次に2枚目の用紙には「あなたの20個の記述について以下の各問に答えて下さい」として以下の7つの設問が記されてある。

1) まず記述するときの様子についてお聞きします。20個の記述の中には割合スラスラと出てきたものとしばらく考えてみないと出てこないものがあったと思います。20個のそれぞれの項目をもれなく以下のイロハの3段階に分類し( )内に各項目の番号を記入して下さい。

イ　スラスラ出てきたもの（　　）

ロ　少し考えたもの　　（　　）

ハ　かなり考えたもの　　（　　）

2) 20個の各項目はそれぞれあなたの日頃の行動の仕方にどの程度影響しているでしょうか。20個のそれぞれの項目をもれなく以下イロハの4段階に分類し（ ）内に各項目の番号を記入して下さい。

イ　非常に強く影響しているもの（　　）

ロ　かなり影響しているもの　　（　　）

ハ　少しは影響しているもの　　（　　）

ニ　全然影響しないもの　　（　　）

3) あなたが日頃，しばしば意識する項目の番号を（ ）内に記入して下さい。（いくつでもよい）　（　　）

4) あなたが日頃，ほとんど意識していない項目の番号を（ ）内に記入して下さい。（いくつでもよい）　（　　）

5) あなた自身の「自分らしさ」あるいは「自分のイメージ」を形づくるうえで，以下のイロにあてはまる項目の番号を（ ）内に記入して下さい。(いくつでもよい)

イ　それをとってしまえば「自分らしさ」あるいは「自分のイメージ」がくずれてしまうと思う項目（　　）

ロ　それをとってしまってもべつに「自分らしさ」あるいは「自分のイメージ」に大した変化を生じないと思う項目（　　）

6) あなたは「自分らしさ」「自分のイメージ」を，どの程度ハッキリと自覚しているでしょうか。自分で判断して，イロハニのいずれかに○印につけて下さい。

イ　非常にハッキリ自覚している。

ロ　かなりハッキリ自覚している。

ハ　おぼろげに自覚している。

ニ　まったく「自分らしさ」「自分のイメージ」がつかめない。

7) 20個のそれぞれの項目をもれなく以下のイロハに分類し（ ）内に各項目の番号を記入して下さい。

イ　あなたがそうでありつづけたいと思う項目（　　）

ロ　あなたがそうであることにこだわらない，別にそうでなくてもよいと思う項目

（　　）

ハ　あなたがそうでありたくないと思う項目（　　）

2　テスト実施手続

本研究においてはテスト実施場所は大学の講義室である。まずとなりの人の答えがのぞけない程度の間隔をあけて着席させ，「これからTSTとうテストをやってもらいますが，これはみなさんが自分自身についてどう考えているかを調べるものであって，学力や知能などを測定するものではなく，何が書かれてあっても研究以外に用いられるものではありません」という意味の説明を与え，1枚目の用紙を配る。配り終ったところで用紙に書かれてある教示を読みあげ，被験者には黙読してもらう。その際，質問があったら手をあげ，係の人がそばにきてからするようにということを強調する。1枚目の用紙に記入のおわった者から手をあげてもらい，順次2枚目の用紙を配り記入させる。全員が記入しおわる所要時間は約40分であった。

3　調査実施時期及び対象

調査実施時期は1973年6月。調査対象は大阪音楽大学音楽専攻科一回生，女子164名である。なお以下の分析に供した資料は，記入もれのあった19名をのぞいたものの中から，ランダムに選択した100名の資料である。

## Ⅲ　結　　果

1　記述内容の分類

西村(1964)，菊池(1970)の分類を主に参考にし，今回はさらに細い分類カテゴリーを設けた。

①類は社会繋留的記述で，自己を社会的集団への所属，社会的役割に関連させて定義しているもので，Consensual(合意的)記述とも言う。その中に以下の12個の下位分類を含む。①-1 人間 ①-2 性(女性) ①-3 学校，学生，学年等 ①-4 年令，生年月日 ①-5 出身地，住所 ①-6 出生順位，家族構成 ①-7 世代(青年，若者等) ①-8 民族，人種，国籍 ①-9 既婚，未婚 ①-10 特定の集団への所属 ①-11 姓名 ①-12 その他。

②類は準合意的記述で，自己を②-1 生物，動物，地球人等の上位概念によって規定するもの，②-2 人間の身体的文化的機能によってあるいは人間の形而上的，宗教的定義によって規定するもの，の2つの下位分類から成る。

③類は「私は世界中にただ一人」「私は母親の胎内から生まれた」等の単なる普遍的事実の記述

④類はさまざまの側面にわたる自己の属性についての記述。自己叙述的記述と呼ぶ。これは，次のような下位分類から成る。④-B身体的側面($B_1$ 健康，体質 $B_2$ 容姿，体格 $B_3$ 運動能力，動作) ④-P心的側面($P_1$ 才能，能力 $P_2$ 気質，性格 $P_2'$ 対人態度 $P_3$ 関心，好み，趣味 $P_4$ 願望，欲求 $P_5$ 主義，意見，その他) ④-S 社会的対人的側面($S_1$ 家族関係 $S_2$ 友人関係 $S_3$

異性関係　$S_4$ 対社会関係）　④-L生活的側面（$L_1$ 日常的生活習慣，生活上の事実　$L_2$ 生活態度，生活感情）　④-T時間的側面（$T_1$ 過去の事実，過去への態度　$T_2$ 未来の事実，未来への態度）。

⑤類は④類には入らない全体的な自己についての規定。アナロジーによる自己規定をも含む。「私は神経症である」「私は雪のような存在」など。

⑥類は自己に対する感情，評価，願望などそのものの記述。⑥-1 対自己感情，評価　⑥-2 対自己願望　⑥-3「私は誰だかわからない」に類する記述　⑥-4「私は私」に類する記述の4つの下位分類からなる。

⑦類は「今これを書いている」「早くおわらないかと思っている」など記述時の状態を記述したもの。

⑧類はその他

以上が，今回，記述内容の分類のために設けたカテゴリーである。各カテゴリーに属する記述の数は表1に示すとおりである。

表によれば，①類と④類で記述の80%をつくしている。①類の中では「学生」[①3]「出生順位」[①6]「女性」[①2]「人間」[①1]が多く，④類の中では「性格」[④$P_2$]がとびぬけて多く，全体の20%にも及び，次いで「対人態度」[④$P_2'$]「関心，興味」[④$P_3$]が多くなっている。

**表1**　各カテゴリーに属する記述数

| カテゴリー | | 実数 | % | 小計 | % |
|---|---|---|---|---|---|
| ① 類 | 1 | 49 | 2.45 | 448 | 22.40 |
| | 2 | 65 | 3.25 | | |
| | 3 | 91 | 4.55 | | |
| | 4 | 40 | 2.00 | | |
| | 5 | 38 | 1.90 | | |
| | 6 | 74 | 3.70 | | |
| | 7 | 13 | 0.65 | | |
| | 8 | 31 | 1.55 | | |
| | 9 | 1 | 0.05 | | |
| | 10 | 4 | 0.20 | | |
| | 11 | 25 | 1.25 | | |
| | 12 | 17 | 0.85 | | |
| ② 類 | 1 | 31 | 1.55 | 80 | 4.00 |
| | 2 | 49 | 2.45 | | |
| ③ 類 | | 34 | 1.70 | 34 | 1.70 |
| ④ 類 | $B_1$ | 21 | 1.05 | | |
| | $B_2$ | 32 | 1.60 | | |
| | $B_3$ | 4 | 0.20 | | |
| | $P_1$ | 25 | 1.25 | | |
| | $P_2$ | 415 | 20.75 | | |
| | $P_2'$ | 160 | 8.00 | | |
| | $P_3$ | 159 | 7.95 | 1143 | 57.15 |
| | $P_4$ | 77 | 3.85 | | |
| | $P_5$ | 19 | 0.95 | | |
| | $S_1$ | 40 | 2.00 | | |
| | $S_2$ | 28 | 1.40 | | |
| | $S_3$ | 16 | 0.80 | | |
| | $S_4$ | 10 | 0.50 | | |
| | $L_1$ | 38 | 1.90 | | |
| | $L_2$ | 55 | 2.75 | | |
| | $T_1$ | 18 | 0.90 | | |
| | $T_2$ | 26 | 1.30 | | |
| ⑤ 類 | | 79 | 3.95 | 79 | 3.95 |
| ⑥ 類 | 1 | 105 | 5.25 | 190 | 9.50 |
| | 2 | 38 | 1.90 | | |
| | 3 | 18 | 0.90 | | |
| | 4 | 29 | 1.45 | | |
| ⑦ 類 | | 11 | 0.55 | 11 | 0.55 |
| ⑧ 類 | | 15 | 0.75 | 15 | 0.75 |
| 計 | | 2000 | 100.00 | 2000 | 100.00 |

**表 2　評　定　相　互　間　の　関　連**

| | | 全数 | 1 イ | 1 ロ | 1 ハ | 2 イ | 2 ロ | 2 ハ | 2 ニ | 3 | 4 | 5 イ | 5 ロ | 7 イ | 7 ロ | 7 ハ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | イ | 968 | | | | 307 (31.7) | 230 (23.8) | 259 (26.8) | 172 (17.7) | 328 (33.9) | 192 (19.8) | 312 (32.2) | 181 (18.7) | 452 (46.7) | 307 (31.7) | 209 (21.6) |
| | ロ | 629 | | | | 98 (15.6) | 183 (29.1) | 223 (35.4) | 125 (19.9) | 180 (28.6) | 127 (20.2) | 145 (23.1) | 135 (21.5) | 196 (31.2) | 245 (38.9) | 188 (29.9) |
| | ハ | 403 | | | | 73 (18.1) | 95 (23.6) | 123 (31.0) | 110 (27.3) | 116 (28.8) | 91 (22.6) | 76 (18.9) | 105 (26.1) | 131 (32.5) | 145 (36.0) | 127 (31.5) |
| 2 | イ | 478 | 307 (64.2) | 98 (20.5) | 73 (15.3) | | | | | 271 (56.7) | 52 (10.9) | 190 (39.8) | 74 (15.5) | 236 (49.4) | 101 (21.1) | 141 (29.5) |
| | ロ | 508 | 230 (45.3) | 183 (36.0) | 95 (18.7) | | | | | 209 (41.1) | 33 ( 6.5) | 173 (34.1) | 74 (14.6) | 188 (37.0) | 156 (30.7) | 164 (32.3) |
| | ハ | 607 | 259 (42.7) | 223 (36.7) | 125 (20.6) | | | | | 121 (19.9) | 126 (20.8) | 128 (21.1) | 134 (22.1) | 213 (35.0) | 234 (38.6) | 160 (26.4) |
| | ニ | 407 | 172 (42.3) | 125 (30.7) | 110 (27.0) | | | | | 23 ( 5.7) | 199 (48.9) | 42 (10.3) | 139 (34.2) | 142 (34.9) | 206 (50.6) | 59 (14.5) |
| 3 | | 624 | 328 (52.6) | 180 (28.8) | 116 (18.6) | 271 (43.4) | 209 (33.5) | 121 (19.4) | 23 ( 3.7) | | | 271 (43.4) | 92 (14.7) | 221 (35.4) | 151 (24.2) | 252 (40.4) |
| 4 | | 410 | 192 (46.8) | 127 (31.0) | 91 (22.2) | 52 (12.7) | 33 ( 8.1) | 126 (30.7) | 199 (48.5) | | | 54 (13.2) | 150 (36.6) | 155 (37.8) | 207 (50.5) | 48 (11.7) |
| 5 | イ | 533 | 312 (58.5) | 145 (27.2) | 76 (14.3) | 190 (35.7) | 173 (32.4) | 128 (24.0) | 42 ( 7.9) | 271 (50.8) | 54 (10.1) | | | 270 (50.7) | 131 (24.6) | 132 (24.7) |
| | ロ | 421 | 181 (43.0) | 135 (32.1) | 105 (24.9) | 74 (17.6) | 74 (17.6) | 134 (31.8) | 139 (33.0) | 92 (21.9) | 150 (35.6) | | | 122 (29.0) | 186 (44.2) | 133 (26.8) |
| 7 | イ | 779 | 452 (58.0) | 196 (25.2) | 131 (16.8) | 236 (30.3) | 188 (24.1) | 213 (27.4) | 142 (18.2) | 221 (28.4) | 155 (20.0) | 270 (34.7) | 122 (15.7) | | | |
| | ロ | 697 | 307 (44.1) | 245 (35.1) | 145 (20.8) | 101 (14.5) | 156 (22.4) | 234 (33.6) | 206 (29.5) | 151 (21.7) | 207 (29.7) | 131 (18.8) | 186 (26.7) | | | |
| | ハ | 524 | 209 (39.9) | 188 (35.9) | 127 (24.2) | 141 (26.9) | 164 (31.3) | 160 (30.5) | 59 (11.3) | 252 (48.1) | 48 ( 9.2) | 132 (25.2) | 113 (21.6) | | | |

(　)内の数値はパーセント

2　評定間の関連

各評定間の関連を，例えば設問1で「すらすら出てきた」という評定をうけた記述が，設問2ではどういう評定をうけているかというふうに2つずつ対にして調べた結果を示したのが表2である。

表より評定間の関連を分析する。その際，設問2のイロの評定を一括して「行動に影響する」ハニを一括して「行動に影響しない」として扱う。分析方法は$x^2$検定及びライヤン法（CRによる検定）を用いる。

1）まず設問1の評定と他の設問に対する評定との関連についてみれば，「スラスラ出てきた」ものは「行動に影響しない」より「行動に影響する」とされる比率が高く（1％水準），「少し考えた」「かなり考えた」ものはいずれも逆に「行動に影響しない」とされる比率が高い（各1％水準）。又いずれもが「ほんど意識しない」に比して「しばしば意識する」とされる比率が高いが，特に「すらすら出てきた」「少し考えた」ものにおいてそれが有意である（1％水準）。又「スラスラ出てきた」「少し考えた」ものはいずれも「それをとってしまっても自分らしさに大した変化を生じない」よりも「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」とされる比率が高く，特に「スラスラ出てきた」ものにおいてそれが有意である。他方「かなり考えた」ものは逆の傾向がある（5％水準）。最後に「スラスラ出てきた」ものは，「そうでありつづけたい」の比率が最も高く，次いで「そうであることにこだわらない」「そうでありたくない」となっており，各々の間に有意な差がある（各々1％水準）。又「少し考えた」「かなり考えた」ものはいずれも「そうであることにこだわらない」とされる比率が最も高くなっているが，特に「少し考えた」ものにおいてそれが有意である（5％水準）。

2）設問2の評定と他の設問に対する評定との関連をみれば，「行動に影響する」ものは「ほとんど意識しない」より「しばしば意識する」，「それをとってしまっても自分らしさに大した変化を生じない」より「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」，「そうであることにこだわらない」「そうでありたくない」よりも「そうでありつづけたい」とされる比率がいずれも高い（各々1％水準）。他方「行動に影響しない」ものは逆に「しばしば意識する」より「ほとんど意識しない」，「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」よりも，「それをとってしまっても自分らしさに大した変化を生じない」，「そうでありつづけたい」「そうでありたくない」よりも「そうであることにこだわらない」とされる比率がいずれも高くなっている（各々1％水準）。

3）3，4の設問の評定と他の設問に対する評定との関連をみれば，「しばしば意識する」ものは「行動に影響しない」よりも「行動に影響する」，「それをとってしまっても自分らしさに大した変化を生じない」よりも「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」，「そうであることにこだわらない」よりも「そうでありつづけたい」「そうでありたくない」とされる比率がいずれも高くなっている（各々1％水準）。他方「ほとんど意識しない」ものは逆に「行動に影響する」よりも「行動に影響しない」，「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」よりも

「それをとってしまっても自分らしさに大した変化を生じない」,「そうでありつづけたい」「そうでありたくない」よりも「そうであることにこだわらない」とされる比率がいずれも高い（「そうでありつづけたい」と「そうであることにこだわらない」間のみ5％水準，他はすべて1％水準)。

4) 設問5の評定と他の設問に対する評定との関連をみれば,「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」ものは「行動に影響しない」よりも「行動に影響する」,「ほとんど意識しない」よりも「しばしば意識する」,「そうであることにこだわらない」「そうでありたくない」よりも「そうでありつづけたい」とされる比率がいずれも高い(各々1％水準)。他方「それをとってしまっても自分らしさに大した変化を生じない」ものは「行動に影響する」よりも「行動に影響しない」,「しばしば意識する」よりも「ほとんど意識しない」,「そうでありつづけたい」「そうでありたくない」よりも「そうであることにこだわらない」とされる比率がいずれも高くなっている(各々1％水準)。

5) 最後に設問7の評定と他の設問に対する評定との関連をみれば,「そうでありつづけたい」「そうでありたくない」ものは「行動に影響しない」よりも「行動に影響する」(5％, 1％水準),「ほとんど意識しない」より「しばしば意識する」(各々1％水準),「それをとってしまっても自分らしさに大した変化を生じない」より「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」(1％水準と有意差なし)とされる比率がいずれも高くなっている。他方「そうであることにこだわらない」ものは，いずれにおいても逆の傾向がある（各々1％水準)。

なお設問1の評定との関連では，いずれの設問の設定も「スコスラ出てきた」が最も高い比率をもち,次いで「少し考えた」「かなり考えた」の順になっている。その意味では設問1に対する評定に関する限り，各評定間に大きなちがいはない。しかしながら「スラスラ出てきた」ものの中に，行動に影響し，しばしば意識され，それをとってしまえば自分らしさがなくなり，そうでありつづけたいとされる記述が多いことには注目しておきたい。

以上の結果から,「行動に影響する」「しばしば意識する」「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」「そうでありつづけたい」の各評定間に相関が高く，他方「行動に影響しない」「ほとんど意識しない」「それをとってしまっても自分らしさに大した変化を生じない」「そうであることにこだわらない」の各評定間に相関が高くなっていることがわかる。

3　記述の心理的負荷

各カテゴリーの記述に対する評定結果を上位分類，下位分類にしたがって示したのが表3，表4である。

まず表3から，上位分類カテゴリーに従って記述に対する評定傾向を検討する（$x^2$ 検定，ライン法)。

記述時の様子に関しては，③⑤類をのぞくすべてのカテゴリーにおいて,「スラスラ出てきた」の比率が最も高く,次いで「少し考えた」「かなり考えた」となっている。特に①類は「スラスラ出てきた」の比率が「少し考えた」「かなり考えた」をあわせたよりも有意に高くなっている(1

**表3** 上位分類カテゴリー別にみた評定結果

| | | 1 | | | 2 | | | | 3 | 4 | 5 | | 7 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | イ | ロ | ハ | イ | ロ | ハ | ニ | | | イ | ロ | イ | ロ | ハ |
| ① | 実数 | 316 | 87 | 45 | 137 | 67 | 117 | 127 | 103 | 136 | 91 | 112 | 209 | 211 | 28 |
| | % | 70.5 | 19.4 | 10.1 | 30.6 | 14.9 | 26.1 | 28.4 | 23.0 | 30.4 | 20.3 | 25.0 | 46.7 | 47.1 | 6.2 |
| ② | 実数 | 33 | 33 | 14 | 23 | 16 | 10 | 31 | 8 | 38 | 7 | 19 | 49 | 28 | 3 |
| | % | 41.3 | 41.2 | 17.5 | 28.7 | 20.0 | 12.5 | 38.8 | 10.0 | 47.5 | 8.8 | 23.8 | 61.2 | 35.0 | 3.8 |
| ③ | 実数 | 10 | 10 | 14 | 9 | 5 | 7 | 13 | 8 | 16 | 0 | 13 | 21 | 10 | 3 |
| | % | 29.4 | 29.4 | 41.2 | 26.5 | 14.7 | 20.6 | 38.2 | 23.5 | 47.1 | 0.0 | 38.2 | 61.8 | 29.4 | 8.8 |
| ④ | 実数 | 488 | 404 | 251 | 250 | 362 | 372 | 159 | 408 | 152 | 374 | 204 | 401 | 356 | 386 |
| | % | 42.7 | 35.3 | 22.0 | 21.9 | 31.7 | 32.5 | 13.9 | 35.7 | 13.3 | 32.7 | 17.9 | 35.1 | 31.1 | 33.8 |
| ⑤ | 実数 | 23 | 26 | 30 | 15 | 13 | 25 | 26 | 22 | 26 | 16 | 24 | 26 | 27 | 26 |
| | % | 29.1 | 32.9 | 38.0 | 19.0 | 16.5 | 31.6 | 32.9 | 27.9 | 32.9 | 20.3 | 30.4 | 32.9 | 34.2 | 32.9 |
| ⑥ | 実数 | 85 | 61 | 44 | 42 | 44 | 71 | 33 | 73 | 26 | 44 | 39 | 69 | 49 | 72 |
| | % | 44.7 | 32.1 | 23.2 | 22.1 | 23.1 | 37.4 | 17.4 | 38.4 | 13.7 | 23.2 | 20.5 | 36.3 | 25.8 | 37.9 |
| ⑦ | 実数 | 7 | 2 | 2 | 0 | 0 | 3 | 8 | 1 | 5 | 1 | 5 | 0 | 6 | 5 |
| | % | 63.6 | 18.2 | 18.2 | 0.0 | 0.0 | 27.3 | 72.7 | 9.1 | 45.5 | 9.1 | 45.5 | 0.0 | 54.5 | 45.5 |
| ⑧ | 実数 | 6 | 6 | 3 | 2 | 1 | 2 | 10 | 1 | 11 | 0 | 5 | 4 | 10 | 1 |
| | % | 40.0 | 40.0 | 20.0 | 13.3 | 6.7 | 13.3 | 66.7 | 6.7 | 73.3 | 0.0 | 33.3 | 26.7 | 66.7 | 6.6 |

%水準)。他方③⑤類では逆の傾向がみられる。

日頃の行動への影響に関しては，①②③類は「非常に強く影響する」と「全然影響しない」の両極に比率が高くなる傾向がみられ，特に①②類では，両者をあわせたものと，「かなり影響する」「少しは影響する」をあわせたものとの間に有意な差がみられる(1%水準)。④⑥類では「かなり影響する」「少しは影響する」と中間に比率が高くなっている（④類では「かなり影響する」「少しは影響する」のいずれもが「非常に強く影響する」「全然影響しない」のいずれよりも1%水準で比率が高い。⑥類では前二者をあわせたものが後二者をあわせたものより1%水準で比率が高い)。⑤⑦類は「少しは影響する」「全然影響しない」をあわせたものが「非常に強く影響する」「かなり影響する」をあわせたものより比率が高く（1%水準)，⑧類は「全然影響しない」の比率が最も高くなっている。

意識する程度については，④⑥類以外のカテゴリーでは「しばしば意識する」より「ほとんど意識しない」の比率が高く，特に①②⑧類では有意差がある(5%，1%，5%水準)。④⑥類では逆の傾向がある（1%水準）次に自分らしさについてみれば，④⑥類以外のカテゴリーでは「それをとってしまえば自分らしさがくづれてしまう」より「それをとってしまっても自分らしさに大した変化を生じない」の比率が高く，特に②③類においてそれが有意である(5%，1%水準)。④⑥類は逆の傾向があり，特に④類にその傾向が有意(1%水準)。

最後に①②類は「そうでありつづけたい」「そうであることにこだわらない」がいずれも「そうでありたくない」よりも比率が高く，（1%水準)，③類は「そうでありつづけたい」が「そうでありたくない」よりも比率が高い(1%水準)。又④⑥類は「そうであることにこだわらない」の

**表4**　下位分類カテゴリー別にみた評定結果

| | 全数 | 1 | | | 2 | | | | 3 | 4 | 5 | | 7 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | イ | ロ | ハ | イ | ロ | ハ | ニ | | | イ | ロ | イ | ロ | ハ |
| ① 1 | 49 | 42 | 6 | 1 | 19 | 1 | 7 | 22 | 5 | 33 | 6 | 10 | 38 | 11 | 0 |
| 2 | 65 | 60 | 4 | 1 | 32 | 10 | 13 | 10 | 28 | 10 | 23 | 8 | 37 | 27 | 1 |
| 3 | 91 | 71 | 13 | 7 | 38 | 22 | 25 | 6 | 30 | 6 | 19 | 25 | 33 | 53 | 5 |
| 4 | 40 | 23 | 10 | 7 | 3 | 4 | 14 | 19 | 4 | 16 | 7 | 14 | 10 | 28 | 2 |
| 5 | 38 | 20 | 14 | 4 | 1 | 5 | 11 | 21 | 2 | 19 | 4 | 20 | 8 | 27 | 3 |
| 6 | 74 | 43 | 17 | 14 | 13 | 18 | 25 | 18 | 15 | 19 | 8 | 18 | 39 | 27 | 8 |
| 7 | 13 | 6 | 5 | 2 | 4 | 2 | 5 | 2 | 4 | 1 | 2 | 3 | 7 | 4 | 2 |
| 8 | 31 | 23 | 6 | 2 | 10 | 1 | 8 | 12 | 3 | 15 | 6 | 8 | 13 | 16 | 2 |
| 9 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 10 | 4 | 2 | 1 | 1 | 2 | 0 | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 0 | 1 | 2 | 1 |
| 11 | 25 | 21 | 2 | 2 | 10 | 3 | 4 | 8 | 6 | 9 | 12 | 5 | 14 | 10 | 1 |
| 12 | 17 | 5 | 8 | 4 | 4 | 1 | 4 | 8 | 3 | 7 | 3 | 1 | 9 | 6 | 2 |
| ② 1 | 31 | 14 | 15 | 2 | 5 | 2 | 3 | 21 | 1 | 25 | 2 | 11 | 17 | 12 | 2 |
| 2 | 49 | 19 | 18 | 12 | 18 | 14 | 7 | 10 | 7 | 13 | 5 | 8 | 32 | 16 | 1 |
| ③ | 34 | 10 | 10 | 14 | 9 | 5 | 7 | 13 | 8 | 16 | 0 | 13 | 21 | 10 | 3 |
| ④ $B_1$ | 21 | 5 | 12 | 14 | 6 | 9 | 2 | 4 | 6 | 4 | 3 | 4 | 5 | 7 | 9 |
| $B_2$ | 32 | 17 | 6 | 9 | 4 | 5 | 14 | 9 | 9 | 5 | 11 | 8 | 4 | 15 | 13 |
| $B_3$ | 4 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 |
| ④ $P_1$ | 25 | 14 | 4 | 7 | 5 | 12 | 4 | 4 | 5 | 0 | 7 | 3 | 8 | 6 | 11 |
| $P_2$ | 415 | 176 | 151 | 88 | 114 | 144 | 135 | 22 | 159 | 52 | 160 | 55 | 95 | 120 | 200 |
| $P_2'$ | 160 | 66 | 53 | 41 | 28 | 70 | 54 | 8 | 65 | 19 | 66 | 21 | 47 | 56 | 57 |
| $P_3$ | 159 | 76 | 57 | 26 | 19 | 40 | 58 | 42 | 30 | 29 | 43 | 32 | 92 | 58 | 9 |
| $P_4$ | 77 | 35 | 28 | 14 | 11 | 18 | 29 | 19 | 32 | 5 | 20 | 18 | 42 | 22 | 13 |
| $P_5$ | 19 | 6 | 6 | 7 | 3 | 4 | 4 | 8 | 5 | 2 | 8 | 4 | 10 | 6 | 3 |
| ④ $S_1$ | 40 | 14 | 18 | 8 | 13 | 10 | 12 | 5 | 11 | 6 | 11 | 4 | 24 | 7 | 9 |
| $S_2$ | 28 | 6 | 15 | 7 | 9 | 6 | 10 | 3 | 10 | 3 | 7 | 2 | 15 | 7 | 6 |
| $S_3$ | 16 | 8 | 5 | 3 | 6 | 3 | 6 | 1 | 11 | 4 | 6 | 4 | 7 | 8 | 1 |
| $S_4$ | 10 | 2 | 4 | 4 | 1 | 0 | 3 | 6 | 1 | 2 | 3 | 4 | 3 | 3 | 4 |
| ④ $L_1$ | 38 | 19 | 14 | 5 | 8 | 10 | 11 | 9 | 14 | 8 | 7 | 15 | 9 | 17 | 12 |
| $L_2$ | 55 | 22 | 17 | 16 | 8 | 20 | 18 | 9 | 32 | 5 | 9 | 20 | 22 | 9 | 24 |
| ④ $T_1$ | 18 | 10 | 6 | 2 | 7 | 4 | 7 | 0 | 8 | 4 | 6 | 3 | 4 | 4 | 10 |
| $T_2$ | 26 | 10 | 7 | 9 | 7 | 6 | 4 | 9 | 8 | 3 | 6 | 6 | 13 | 9 | 4 |
| ⑤ | 79 | 23 | 26 | 30 | 15 | 13 | 25 | 26 | 22 | 26 | 16 | 24 | 26 | 27 | 26 |
| ⑥ 1 | 105 | 42 | 39 | 24 | 21 | 26 | 44 | 14 | 45 | 15 | 25 | 18 | 17 | 34 | 54 |
| 2 | 38 | 15 | 14 | 9 | 10 | 8 | 14 | 6 | 16 | 2 | 6 | 10 | 28 | 4 | 6 |
| 3 | 18 | 6 | 2 | 10 | 1 | 3 | 5 | 9 | 6 | 5 | 3 | 7 | 1 | 5 | 12 |
| 4 | 29 | 22 | 6 | 1 | 10 | 7 | 8 | 4 | 6 | 4 | 10 | 4 | 23 | 6 | 0 |
| ⑦ | 11 | 7 | 2 | 2 | 0 | 0 | 3 | 8 | 1 | 5 | 1 | 5 | 0 | 6 | 5 |
| ⑧ | 15 | 6 | 6 | 3 | 2 | 1 | 2 | 10 | 1 | 11 | 0 | 5 | 4 | 10 | 1 |
| 計 | 2000 | 968 | 629 | 403 | 478 | 508 | 607 | 407 | 624 | 410 | 533 | 421 | 779 | 697 | 524 |

比率が最も低く，⑤⑦⑧類では逆に最も高くなっている傾向がある。

次に下位分類カテゴリーにしたがってみた記述の評定傾向を検討する。各設問ごとに，評定に有意な傾向のあるもの（5％水準以下のもの）を$x^2$検定，ライヤン法によって検出すれば次のようになる(表4を参照)。

設問1：「人間$^{①1}$」「女性$^{①2}$」「学生$^{①3}$」「国籍$^{①8}$」「姓名$^{①11}$」「私は私$^{⑥4}$」はいずれも「ススラ出てきた」の比率が「少し考えた」「かなり考えた」をあわせたものよりも高い。「出生順位$^{①6}$」は「スラスラ出てきた」の比率が「少し考えた」「かなり考えた」のいずれよりも高い。「年令$^{①4}$」「出身地$^{①5}$」「願望$^{④P_4}$」「生活習慣$^{④L_1}$」はいずれも「かなり考えた」より「スラスラ出てきた」の比率が高い。「人間の上位概念$^{②1}$」「性格$^{④P_2}$」「関心$^{④P_3}$」はいずれも「かなり考えた」よりも「スラスラ出てきた」「少し考えた」の比率が高い。

設問2：「人間$^{①1}$」は「かなり影響する」「少しは影響する」をあわせたよりも「非常に強く影響する」「全然影響しない」をあわせた比率が高く，両極に比率が高くなっている。「女性$^{①2}$」は非常に強く影響する」が他のいずれよりも比率が高い。「女性$^{①2}$」「学生$^{①3}$」「人間の身体的文化的規定$^{②2}$」「性格$^{④P_2}$」「体質$^{④B_1}$」はいずれも「少しは影響する」「全然影響しない」をあわせたよりも「非常に強く影響する」「かなり影響する」をあわせた比率が高い。すならち行動への影響度の高い方へ比率が高くなっている。「年令$^{①4}$」「出身地$^{①5}$」「容姿$^{④B_2}$」「対社会関係$^{④S_4}$」⑤類，「私は誰だかわからない$^{⑥3}$」⑦類，⑧類は逆に「少しは影響する」「全然影響しない」をあわせた比率が高く，行動への影響度の低い方が比率が高くなっている。「学生$^{①3}$」「性格$^{④P_2}$」は「全然影響しない」の比率が他のいずれよりも低い。逆に「人間の上位概念$^{②1}$」は「全然影響しない」の比率が他のすべてをあわせたよりも高く，「全然影響しない」に集中している。

設問3・4：「女性$^{①2}$」「学生$^{①3}$」「性格$^{④P_2}$」「対人態度$^{④P_2'}$」「願望$^{④P_4}$」「生活態度$^{④L_2}$」「自己評価$^{⑥1}$」「対自己願望$^{⑥2}$」はいずれも「ほとんど意識しない」よりも「しばしば意識する」の比率が高い。他方「人間$^{①1}$」「年令$^{①4}$」「出身地$^{①5}$」「国籍$^{①8}$」「人間の上位概念$^{②}$」⑧類はいずれも「しばしば意識する」よりも「ほとんど意識しない」の比率が高い。

設問5：「女性$^{①2}$」「性格$^{④P_2}$」「対人態度$^{④P_2'}$」は「それをとっても自分らしさに大した変化を生じない」よりも「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」の比率が高く，「出身地$^{①5}$」「人間の上位概念$^{①1}$」は逆の傾向がある。

設問7：「人間$^{①1}$」「人間の身体的文化的規定$^{②2}$」「対自己願望$^{⑥2}$」「私は私$^{⑥4}$」はいずれも，「そうであることにこだらない」「そうでありたくない」をあわせたよりも「そうでありつづけたい」の比率が高い。「家族関係$^{④S_1}$」「願望$^{④P_4}$」は「そうでありつづけたい」が他のいずれよりも比率が高く，「自己評価$^{⑥1}$」は「そうでありつづけたい」の比率が他のいずれよりも低い。「女性$^{①2}$」「学生$^{①3}$」「出生順位$^{①6}$」「国籍$^{①8}$」「姓名$^{①11}$」「人間の上位概念$^{②1}$」「関心$^{④P_3}$」は「そうでありつづけたい」「そうであることにこだわらない」の比率がいずれも「そうでありたくない」よりも高く，「性格」は「そうでありたくない」の比率が他よりも高い。

**表 5** 評定率の高い十位までのカテゴリー

| 順位＼評定 | | 1 イ | 1 ロ | 1 ハ | 2 イ | 2 ロ | 2 ハ | 2 ニ | 3 | 4 | 5 イ | 5 ロ | 7 イ | 7 ロ | 7 ハ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | ①- 2 | ④-$B_1$ | ⑥- 3 | ①- 2 | ④-$P_1$ | ④-$B_2$ | ⑦ | ④-$S_3$ | ②- 1 | ①-11 | ①- 5 | ⑥- 4 | ①- 5 | ⑥- 3 |
| | % | 92.3 | 57.1 | 55.5 | 49.2 | 48.0 | 43.7 | 72.7 | 68.7 | 80.6 | 48.0 | 52.6 | 79.3 | 71.0 | 66.6 |
| 2 | | ①- 1 | ④-$S_2$ | ③ | ①- 3 | ④-$P_2'$ | ⑥- 1 | ⑧ | ④-$L_2$ | ⑧ | ④-$P_5$ | ⑦ | ①- 1 | ①- 4 | ④-$T_1$ |
| | % | 85.7 | 53.5 | 41.1 | 41.7 | 43.7 | 41.9 | 66.6 | 58.1 | 73.3 | 42.1 | 45.4 | 77.5 | 70.0 | 55.5 |
| 3 | | ①-11 | ②- 1 | ④-$S_4$ | ①-11 | ④-$B_1$ | ④-$T_1$ | ②- 1 | ④-$T_1$ | ①- 1 | ④-$P_2'$ | ④-$S_4$ | ⑥- 2 | ⑧ | ⑥- 1 |
| | % | 84.0 | 48.3 | 40.0 | 40.0 | 42.8 | 38.8 | 67.7 | 44.4 | 67.3 | 41.2 | 40.0 | 73.6 | 66.6 | 51.4 |
| 4 | | ①- 3 | ①-12 | ⑤ | ④-$T_1$ | ④-$L_2$ | ①- 7 | ④-$S_4$ | ①- 2 | ①- 5 | ④-$P_2$ | ④-$L_1$ | ②- 2 | ①- 3 | ④-$P_2$ |
| | % | 78.0 | 47.0 | 37.9 | 38.8 | 36.3 | 38.4 | 60.0 | 43.0 | 50.0 | 38.5 | 39.4 | 65.3 | 58.2 | 48.1 |
| 5 | | ⑥- 4 | ④-$S_1$ | ④-$P_5$ | ①- 1 | ④-$P_2$ | ④-$P_4$ | ①- 5 | ⑥- 1 | ①- 8 | ④-$S_3$ | ⑥- 3 | ③ | ⑦ | ⑦ |
| | % | 75.8 | 45.0 | 36.8 | 38.7 | 34.7 | 37.6 | 55.2 | 42.8 | 48.3 | 37.5 | 8.3 | 61.7 | 54.5 | 45.4 |
| 6 | | ①- 8 | ④-$S_4$ | ④-$T_2$ | ④-$S_3$ | ②- 2 | ④-$S_3$ | ⑥- 3 | ⑥- 2 | ③ | ①- 2 | ③ | ④-$S_1$ | ①- 8 | ④-$P_1$ |
| | % | 74.1 | 40.0 | 34.6 | 37.5 | 28.5 | 37.5 | 50.0 | 42.1 | 47.0 | 35.3 | 38.2 | 60.0 | 51.6 | 44.0 |
| 7 | | ⑦ | ⑧ | ④-$L_2$ | ②- 2 | ④-$L_1$ | ⑥- 2 | ①- 4 | ④-$P_4$ | ⑦ | ⑥- 4 | ④-$L_2$ | ④-$P_3$ | ④-$S_3$ | ④-$L_2$ |
| | % | 63.4 | 40.0 | 29.0 | 36.7 | 26.3 | 36.8 | 47.5 | 41.5 | 45.4 | 34.4 | 36.3 | 57.8 | 50.0 | 43.6 |
| 8 | | ①- 6 | ①- 7 | ④-$B_2$ | ⑥- 4 | ④-$P_3$ | ④-$P_3$ | ①-12 | ④-$P_2'$ | ①-12 | ④-$B_2$ | ②- 1 | ①- 2 | ④-$B_2$ | ④-$B_1$ |
| | % | 58.1 | 38.4 | 28.1 | 34.4 | 25.1 | 36.4 | 47.0 | 40.6 | 41.1 | 34.3 | 35.4 | 56.9 | 46.8 | 42.8 |
| 9 | | ①- 4 | ⑥- 1 | ④-$P_1$ | ④-$S_1$ | ④-$S_1$ | ④-$S_2$ | ①- 1 | ④-$P_2$ | ①- 4 | ④-$T_1$ | ①- 4 | ①-11 | ④-$L_1$ | ④-$B_2$ |
| | % | 57.5 | 37.1 | 28.0 | 32.5 | 25.0 | 35.7 | 44.9 | 38.3 | 40.0 | 33.3 | 35.0 | 56.0 | 44.7 | 40.6 |
| 10 | | ④-$P_1$ | ⑥- 2 | ④-$P_2'$ | ①- 8 | ⑥- 1 | ①- 4 | ④-$P_5$ | ④-$L_1$ | ①-11 | ④-$S_4$ | ⑧ | ②- 1 | ①- 2 | ④-$S_4$ |
| | % | 56.0 | 36.8 | 25.6 | 32.2 | 24.7 | 35.0 | 42.1 | 36.8 | 36.0 | 30.0 | 33.3 | 54.8 | 41.5 | 40.0 |

次に各評定ごとに，各カテゴリー内で，そこに占める割合(%)の最も高いものから順に10個の記述カテゴリーをピックアップして示したものが表5である。

表5によれば，「女性①2」「人間①1」「姓名①11」「学生①3」などが最も「スラスラ」出てくる割合が高いものであるが，それらが同時に日頃の行動に「非常に強く影響する」割合も最も高いものになっていることが注目される。特に「女性①2」はその他「しばしば意識する」「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」「そうでありつづけたい」にも姿をみせており，やはり女性のアイデンティティの重要な柱になっていることがうかがえる。「姓名①11」は「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」の最高位に位置していることも注目すべきである。姓名が人のアイデンティティの象徴としての意味をもっていることがここでも確かめられる。(Bugental, et al. 1950) (Lazard, D. 1946)

「しばしば意識する」の最高位にある「異性関係④S3」は「非常に行動に影響する」「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」にもランク入りしており，重要なカテゴリーであることがわかる。

「そうでありつづけたい」の最高位にある「私は私⑥4」は同時に「非常に行動に影響する」「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」にもランク入りしており，それが単なるあたり前の事実の記述ではなく，自己確認，自己肯定の意味をこめた記述であることがわかる。「私は誰だかわからない⑥3」が，逆に「そうでありたくない」の最高位にあることは，その裏返しの意味をもつ。

「性格④P2」は「しばしば意識する」「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」「そうでありたくない」にともにランク入りしており，「過去④T1」はそれに加うるに，「非常に強く行動に影響する」にもランク入りしており，共に否定的アイデンティティを構成する傾向があることがわかる。

以上，特徴的な傾向をとりだしてみたが，次に，何が「肯定的アイデンティティ」を構成し，何が「否定的アイデンティティ」を構成するかを，さらに明確にするために，a)「非常に強く行動に影響する」と評定され，同時に「そうでありつづけたい」と評定された記述，b)「しばしば意識する」と同時に「そうでありつづけたい」記述，c)「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」と同時に「そうでありつづけたい」記述，d)「非常に強く行動に影響する」と同時に「そうでありたくない」記述，e)「しばしば意識する」と同時に「そうでありたくない」記述，f)「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」と同時に「そうでありたくない」記述，を各々ピックアップし，その割合の高いカテゴリーを各々10個とりだして示したのが表6である。

表6から，肯定的アイデンティティ(a b c)を構成する傾向の強いものとして，「私は私⑥4」「女性①2」「異性関係④S3」「友人関係④S2」「未来④T2」「姓名①11」等があげられ，否定的アイデンティティ(d e f)を構成する傾向が強いものとして，「性格④P2」「対人態度④P2′」「自己評価⑥1」「生活態度④L2」「体質④B1」「容姿④B2」「私は誰

**表6**　肯定的一否定的アイデンティティを構成する評定率の高い十位までのカテゴリー

| 順位＼評定 | a | b | c | d | e | f |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ⑥- 4 | ④-$S_3$ | ④-$P_5$ | ④-$P_2$ | ④-$L_2$ | ④-$T_1$ |
| % | 34.5 | 37.5 | 36.8 | 16.1 | 34.6 | 22.2 |
| 2 | ②- 2 | ①- 2 | ⑥- 4 | ⑥- 1 | ⑥- 1 | ④-$P_2$ |
| % | 32.7 | 26.2 | 31.0 | 15.2 | 29.5 | 15.9 |
| 3 | ①-11 | ④-$P_4$ | ①-11 | ④-$B_1$ | ④-$B_1$ | ④-$B_2$ |
| % | 32.0 | 26.0 | 28.0 | 14.3 | 28.6 | 15.6 |
| 4 | ④-$S_3$ | ⑥- 2 | ④-$S_3$ | ④-$L_1$ | ④-$T_1$ | ④-$P_2'$ |
| % | 31.3 | 23.7 | 25.0 | 13.2 | 27.8 | 10.6 |
| 5 | ①- 2 | ⑥- 4 | ④-$T_2$ | ⑤ | ④-$P_2$ | ④-$S_1$ |
| % | 29.2 | 20.7 | 23.1 | 10.1 | 22.7 | 10.0 |
| 6 | ①- 1 | ④-$L_2$ | ④-$P_3$ | ④-$L_2$ | ⑥- 3 | ⑦ |
| % | 28.6 | 2.00 | 21.4 | 9.1 | 22.2 | 9.1 |
| 7 | ④-$S_2$ | ④-$S_1$ | ①- 2 | ④-$P_1$ | ④-$B_2$ | ⑥- 1 |
| % | 28.6 | 20.0 | 20.0 | 8.0 | 21.9 | 7.6 |
| 8 | ④-$S_1$ | ④-$T_2$ | ④-$P_1$ | ⑥- 2 | ④-$L_1$ | ⑥- 3 |
| % | 27.5 | 19.2 | 20.0 | 7.9 | 21.1 | 5.6 |
| 9 | ③ | ④-$S_2$ | ④-$S_4$ | ④-$P_2'$ | ④-$P_2'$ | ①- 6 |
| % | 23.5 | 17.9 | 20.0 | 6.9 | 16.9 | 5.4 |
| 10 | ④-$T_2$ | ①-12 | ④-$S_2$ | ①-12 | ⑥- 2 | ⑥- 2 |
| % | 23.1 | 17.7 | 17.9 | 5.9 | 13.2 | 5.3 |

だかわからない⑥3」「過去④$T_1$」等があげられる。

特に興味深いのは，「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」とされ，しかも同時に「そうでありたくない」とされる記述（d）のトップにきているのが「過去」である事実である。「過去」は青年にとって，自己のアイデンティティを構成するものの中で否定されるべき第一のものなのか。

最後に，各カテゴリーに属する記述の重要性を検討してみる。その際，前の分析で相互に相関の高かった「行動に影響する」「しばしば意識する」「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」「そうでありつづけたい」と，それに加うるに「そうでありたくない」の各評定に1点の得点を与え，各記述の評定を得点化し，合計したものをその記述の重要性得点と操作的に規定する。そうすれば各記述は0点から4点までのうちのいずれかの重要性得点をもつことになる。なお「そうでありたくない」を得点に加えたのは，「そうでありつづけたい」とは逆の否定的な方

**表7**　上位分類カテゴリー別にみた重要性得点ごとの記述数

| カテゴリー＼得点 | 0 | | 1 | | 2 | | 3 | | 4 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 実数 | % | 実数 | % | 実数 | % | 実数 | % | 実数 | % |
| ① | 121 | 27.0 | 143 | 31.9 | 99 | 22.1 | 53 | 11.8 | 32 | 7.2 |
| ② | 21 | 26.3 | 23 | 28.7 | 26 | 32.5 | 9 | 11.2 | 1 | 1.3 |
| ③ | 6 | 17.7 | 13 | 38.2 | 12 | 35.3 | 3 | 8.8 | 0 | 0.0 |
| ④ | 174 | 15.2 | 277 | 24.3 | 301 | 26.3 | 270 | 23.6 | 121 | 10.6 |
| ⑤ | 16 | 20.3 | 29 | 36.7 | 14 | 17.7 | 14 | 17.7 | 6 | 7.6 |
| ⑥ | 30 | 15.8 | 52 | 27.4 | 45 | 23.7 | 48 | 25.2 | 15 | 7.9 |
| ⑦ | 6 | 54.5 | 3 | 27.3 | 2 | 18.2 | 0 | 0.0 | 0 | 0.0 |
| ⑧ | 8 | 53.3 | 4 | 26.7 | 3 | 20.0 | 0 | 0.0 | 0 | 0.0 |
| 計 | 382 | 19.1 | 544 | 27.2 | 502 | 25.1 | 397 | 19.9 | 175 | 8.7 |

向ではあるが,「そうであることにこだららない」に比して重い意味をもつと考えるからである。

カテゴリー別にみた各得点ごとの記述数を示したのが，表7，表8である。

表によれば，全体の記述の分布状態は，中央，すなわち，1，2，3点に多く分布し，0，4点の両極は少ないことがわかる。また，上位分類カテゴリー別にみれば，全体の平均的分布を基準にすると，①②③⑤⑦⑧類は左側（得点の低い方）のパーセントが高い傾向がみられ，④類は逆に右側（得点の高い方）のパーセントが高い傾向がみられる。⑥類は両方にまたがっている。表7から，0点1点をあわせた度数と2点3点4点をあわせた度数を各カテゴリーごとに比較してみると，①②③⑤⑦⑧類は前者の比率が高く，特に①類⑧類ではその傾向を有意である（$X^2$検定，1％及び5％水準）。④⑥類は逆に後者の比率が高く，特に④類ではその傾向が有意である（$X^2$検定，1％水準）。

次に下位分類カテゴリーごとに同様の検定を行えば，「女性$^{①2}$」「世代$^{①7}$」をのぞくすべての①類のカテゴリー，「人間の上位概念$^{②1}$」「容姿$^{④B_2}$」「対社会関係$^{④S_4}$」「私は誰だかわからない$^{⑥3}$」は，1点2点をあわせた比率の方が高く，特に「年令$^{①4}$」「出身地$^{①5}$」「国籍$^{①8}$」「人間の上位概念$^{②1}$」においてその傾向が有意である（「国籍$^{①8}$」のみ5％水準，その他1％水準）。

他方，「女性$^{①2}$」「世代$^{①7}$」「人間の身体的文化的規定$^{②2}$」及び「容姿$^{④B_2}$」「対社会関係$^{④S_4}$」をのぞくすべての④類に属するカテゴリー，「私は誰だかわからない$^{⑥3}$」をのぞくすべての⑥類に属するカテゴリーでは，2点3点4点をあわせた比率の方が高くなっており，特に「女性$^{①2}$」「性格$^{④P_2}$」「対人態度$^{④P_2'}$」「生活態度$^{④L_2}$」においてその傾向が有意である（すべて1％水準）。

以上の結果からみれば，TSTにあらわれる記述の二大分類カテゴリーである①類と④類は，ここで操作的に規定した限りでの重要性という点からみれば，明確に区別されうる。すなわち，一般に①類は重要性が低く，④類は重要性が高いということである。

4　記述の出現順位

**表8**　下位分類カテゴリー別にみた重要性得点ごとの記述数

| カテゴリー＼得点 | | 0 | | 1 | | 2 | | 3 | | 4 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 実数 | % | 実数 | % | 実数 | % | 実数 | % | 実数 | % |
| ① | 1 | 5 | 10.2 | 26 | 53.1 | 13 | 26.5 | 4 | 8.2 | 1 | 2.0 |
| | 2 | 11 | 16.9 | 11 | 16.9 | 18 | 27.8 | 19 | 29.2 | 6 | 9.2 |
| | 3 | 17 | 18.7 | 29 | 31.9 | 24 | 26.4 | 13 | 14.3 | 8 | 8.7 |
| | 4 | 21 | 52.5 | 11 | 27.5 | 4 | 10.0 | 2 | 5.0 | 2 | 5.0 |
| | 5 | 25 | 65.8 | 8 | 21.1 | 2 | 5.3 | 1 | 2.6 | 2 | 5.2 |
| | 6 | 16 | 21.6 | 27 | 36.5 | 21 | 28.4 | 7 | 9.4 | 3 | 4.1 |
| | 7 | 2 | 15.4 | 4 | 30.8 | 6 | 46.2 | 0 | 0.0 | 1 | 7.7 |
| | 8 | 13 | 41.9 | 9 | 29.0 | 4 | 12.9 | 3 | 9.7 | 2 | 6.5 |
| | 9 | 0 | | 0 | | 0 | | 1 | | 0 | |
| | 10 | 2 | | 0 | | 0 | | 1 | | 1 | |
| | 11 | 4 | 16.0 | 10 | 40.0 | 6 | 24.0 | 2 | 8.0 | 3 | 12.0 |
| | 12 | 5 | 29.4 | 8 | 47.1 | 1 | 5.9 | 0 | 0.0 | 3 | 17.6 |
| ② | 1 | 11 | 35.5 | 13 | 41.9 | 5 | 16.1 | 2 | 6.5 | 0 | 0.0 |
| | 2 | 10 | 20.4 | 10 | 20.4 | 21 | 42.9 | 7 | 14.3 | 1 | 2.0 |
| ③ | | 6 | 17.6 | 13 | 38.3 | 12 | 35.3 | 3 | 8.8 | 0 | 0.0 |
| ④ | $B_1$ | 4 | 19.1 | 4 | 19.1 | 5 | 23.8 | 7 | 33.3 | 1 | 4.7 |
| | $B_2$ | 6 | 18.8 | 12 | 37.5 | 8 | 25.0 | 5 | 15.6 | 1 | 3.1 |
| | $B_3$ | 2 | | 0 | | 0 | | 1 | | 1 | |
| | $P_1$ | 3 | 12.0 | 6 | 24.0 | 7 | 28.0 | 7 | 28.0 | 2 | 8.0 |
| | $P_2$ | 44 | 10.6 | 101 | 24.3 | 107 | 25.8 | 98 | 23.6 | 65 | 15.7 |
| | $P_2'$ | 17 | 10.6 | 37 | 23.1 | 47 | 29.4 | 39 | 24.4 | 20 | 12.5 |
| | $P_3$ | 40 | 25.2 | 42 | 26.4 | 45 | 28.3 | 25 | 15.7 | 7 | 4.4 |
| | $P_4$ | 17 | 22.1 | 18 | 23.4 | 17 | 22.1 | 21 | 27.3 | 4 | 5.1 |
| | $P_5$ | 3 | 15.8 | 4 | 21.4 | 7 | 36.5 | 5 | 26.3 | 0 | 0.0 |
| | $S_1$ | 3 | 7.5 | 11 | 27.5 | 13 | 32.5 | 11 | 27.5 | 2 | 5.0 |
| | $S_2$ | 4 | 14.3 | 5 | 17.9 | 12 | 42.8 | 4 | 14.3 | 3 | 10.7 |
| | $S_3$ | 2 | 12.5 | 4 | 25.0 | 3 | 18.8 | 4 | 25.0 | 3 | 18.7 |
| | $S_4$ | 2 | 20.0 | 6 | 60.0 | 1 | 10.0 | 0 | 0.0 | 1 | 10.0 |
| | $L_1$ | 12 | 31.6 | 7 | 18.4 | 6 | 15.8 | 11 | 28.9 | 2 | 5.3 |
| | $L_2$ | 6 | 10.9 | 11 | 20.0 | 12 | 21.8 | 22 | 40.0 | 4 | 7.3 |
| | $T_1$ | 2 | 11.1 | 4 | 22.2 | 5 | 27.8 | 5 | 27.8 | 2 | 11.1 |
| | $T_2$ | 7 | 26.9 | 5 | 19.2 | 6 | 23.1 | 5 | 19.2 | 3 | 11.6 |
| ⑤ | | 16 | 20.3 | 29 | 36.7 | 14 | 17.7 | 14 | 17.7 | 6 | 7.6 |
| ⑥ | 1 | 20 | 19.1 | 25 | 23.8 | 25 | 23.8 | 27 | 25.7 | 8 | 7.6 |
| | 2 | 3 | 7.9 | 12 | 31.6 | 9 | 23.7 | 12 | 31.6 | 2 | 5.2 |
| | 3 | 4 | 22.2 | 7 | 38.9 | 1 | 5.6 | 5 | 27.7 | 1 | 5.6 |
| | 4 | 3 | 10.4 | 8 | 27.6 | 10 | 34.5 | 4 | 13.8 | 4 | 13.7 |
| ⑦ | | 6 | 54.5 | 3 | 27.3 | 2 | 18.2 | 0 | 0.0 | 0 | 0.0 |
| ⑧ | | 8 | 53.3 | 4 | 26.7 | 3 | 20.0 | 0 | 0.0 | 0 | 0.0 |
| 計 | | 382 | 19.1 | 544 | 27.2 | 502 | 25.1 | 397 | 19.8 | 175 | 8.8 |

**表9**　上位分類カテゴリー別にみた記述の出現領域

| 領域＼カテゴリー | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 ( 1- 5) | 251 (56.0) | 26 (32.5) | 8 (27.5) | 162 (14.2) | 11 (13.9) | 38 (20.0) | 0 ( 0.0) | 4 (26.7) |
| 2 ( 6-10) | 104 (23.2) | 23 (28.8) | 13 (38.2) | 297 (26.0) | 15 (19.0) | 43 (22.6) | 3 (27.3) | 2 (13.3) |
| 3 (11-51) | 54 (12.1) | 15 (18.7) | 7 (20.6) | 343 (30.0) | 25 (31.6) | 47 (24.8) | 2 (18.2) | 7 (46.7) |
| 4 (16-20) | 39 ( 8.7) | 16 (20.0) | 6 (17.7) | 341 (29.8) | 28 (35.5) | 62 (32.6) | 6 (54.5) | 2 (13.3) |

(　)内の数値はパーセント

**表10**　下位分類カテゴリー別にみた記述の出現領域

| 領域＼カテゴリー | ① 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | ② 1 | 2 | ③ | ④ $B_1$ | $B_2$ | $B_3$ | $P_1$ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 ( 1- 5) | 42 | 57 | 58 | 15 | 9 | 28 | 5 | 15 | 0 | 2 | 19 | 1 | 12 | 14 | 8 | 1 | 9 | 0 | 4 |
| 2 ( 6-10) | 5 | 4 | 16 | 16 | 15 | 28 | 4 | 9 | 0 | 0 | 1 | 6 | 11 | 12 | 13 | 6 | 4 | 2 | 8 |
| 3 (11-15) | 0 | 3 | 12 | 8 | 7 | 11 | 1 | 2 | 1 | 0 | 4 | 5 | 6 | 9 | 7 | 8 | 12 | 1 | 6 |
| 4 (16-20) | 2 | 1 | 5 | 1 | 7 | 7 | 3 | 5 | 0 | 2 | 1 | 5 | 2 | 14 | 6 | 6 | 7 | 1 | 7 |

| 領域＼カテゴリー | $P_2$ | $P_2'$ | $P^3$ | $P_4$ | $P_5$ | $S_1$ | $S_2$ | $S_3$ | $S_4$ | $L_1$ | $L_2$ | $T_1$ | $T_2$ | ⑤ | ⑥ 1 | 2 | 3 | 4 | ⑦ | ⑧ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 ( 1- 5) | 74 | 28 | 12 | 7 | 3 | 5 | 1 | 3 | 0 | 5 | 4 | 4 | 2 | 11 | 17 | 4 | 4 | 13 | 0 | 4 |
| 2 ( 6-10) | 118 | 44 | 40 | 14 | 4 | 14 | 7 | 5 | 4 | 9 | 10 | 3 | 5 | 15 | 23 | 11 | 4 | 5 | 3 | 2 |
| 3 (11-15) | 110 | 44 | 54 | 28 | 5 | 9 | 11 | 6 | 3 | 12 | 18 | 7 | 9 | 25 | 32 | 9 | 3 | 3 | 2 | 7 |
| 4 (16-20) | 113 | 44 | 53 | 28 | 7 | 12 | 9 | 2 | 3 | 12 | 23 | 4 | 10 | 28 | 33 | 14 | 7 | 8 | 6 | 2 |

1)　記述内容からみた出現順位

各カテゴリーに属する記述が1から20までの範囲のうちにどのように分布しているかを示したのが表9，表10である。(1から20までを4つの領域に区切る)

表9より，それぞれの領域への分布傾向を検討してみる。($X^2$ 検定，ライヤン法)

まず①類は1の領域への分布が他のすべての領域への分布よりも大きく（5％水準)，1の領域に集中的に出現している。②類は，前半への分布（1，2をあわせた分布）が後半への分布（3，4をあわせた分布）よりも大きい(5％水準)。④類は2，3，4への分布がいずれも1への分布よりも大きく，かつ後半への分布が前半への分布よりも大きい(1％水準)。⑤⑥類は前半より後半への分布が大きい（1％，5％水準)。すなわち，①類は1の領域に，②類は前半に，④類は2の領域以降に，⑤⑥類は後半に出現率が高いことがわかる。

同様に，表10より分布傾向を検討すれば，まず，「人間」(①1)「女性」(①2)「学生」(①3)「姓名」(①11)はいずれも1の領域への分布が他の領域すべてへの分布をあわせたよりも大きく（1％水準）1の領域に集中的に出現することがわかる。また，「年令」(①4)「出生順位」(①6)「国籍」(①8)「人間の上位概念」(②1)は前半への分布が後半への分布より大きい（1％水準)。「性格」(④$P_2$)は1の領域への分布が，2,3,4のいずれの領域への分布よりも小さく(5％水準)，「関心」(④$P_3$)もまた同様である(1％水準)。「願望」(④$P_4$)「生活態度」(④$L_2$)

**表11**　各評定をうけた記述の出現領域

| 評定 | 領域 | 1 (1-5) | 2 (6-10) | 3 (11-15) | 4 (16-20) |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | イ | 395 (40.8) | 240 (24.8) | 185 (19.1) | 148 (15.3) |
| | ロ | 85 (13.5) | 208 (33.1) | 189 (30.0) | 147 (23.4) |
| | ハ | 20 ( 5.0) | 52 (12.9) | 126 (31.3) | 205 (50.8) |
| 2 | イ | 176 (36.8) | 106 (22.1) | 107 (22.3) | 90 (18.8) |
| | ロ | 94 (18.5) | 157 (30.9) | 126 (24.8) | 131 (25.8) |
| | ハ | 125 (20.6) | 142 (23.3) | 166 (27.3) | 175 (28.8) |
| | ニ | 105 (25.9) | 95 (23.5) | 101 (24.9) | 104 (25.7) |
| 3 | | 157 (25.2) | 163 (26.2) | 145 (23.3) | 158 (25.3) |
| 4 | | 128 (31.3) | 99 (24.2) | 88 (21.5) | 94 (23.0) |
| 5 | イ | 141 (26.6) | 137 (25.8) | 119 (22.4) | 134 (25.2) |
| | ロ | 94 (22.3) | 102 (24.2) | 116 (27.5) | 110 (26.0) |
| 7 | イ | 221 (28.4) | 182 (23.4) | 184 (23.6) | 192 (24.6) |
| | ロ | 185 (26.5) | 184 (26.3) | 166 (23.7) | 164 (23.5) |
| | ハ | 94 (18.0) | 134 (25.7) | 150 (28.7) | 144 (27.6) |

(　)内の数値はパーセント

は前半より後半への分布が大きく(1％水準)，「友人関係」$^{④S_2}$「未来」$^{④T_2}$「自己評価」$^{⑥1}$もまた同様の傾向がある(5％水準)。

2)　心理的負荷からみた出現順位

次に各々の評定をうけた記述の1から20への分布状態を示したのが表11である。

表11から分布傾向を検討すれば次のようになる($X^2$検定，ライヤン法)。

「非常に強く行動に影響する」とされる記述は，2，3，4のいずれの領域よりも1の領域に多く分布している(1％水準)。「少しは行動に影響する」とされる記述は前半より後半の領域に多く分布している(1％水準)。「ほとんど意識しない」とされる記述は後半より前半の領域に多く分布している(5％水準)。「そうでありたくない」とされる記述は前半より後半の領域に多く出現している(1％水準)。

「全然行動に影響しない」「しばしば意識する」「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」「それをとってしまっても自分らしさに大した変化を生じない」「そうでありつづけたい」「そうであることにこだわらない」等の評定をうけた記述は全領域にほぼ均等に分布している。

なお，記述時の様子についての評定に関してみれば，「スラスラ出てきた」とされる記述は，1の領域にもっとも多く，順次2，3，4の領域へと少なくなっている。1の領域と2の領域，2の領域と3の領域の間にそれぞれ有意差がある(1％，5％水準)。「少し考えた」とされる記述は，中央の2，3の領域に多くなり，1，4の領域に少ない。2，3の領域への分布は各々1，4の

領域への分布よりも有意に大きい(1％ないし5％水準)。最後に「かなり考えた」とされる記述は，1，2，3，4と順次多くなり，となりあう領域間に有意差がみられる(各々1％水準)。

## Ⅳ 考　　察

TST にあらわれる反応は如何なる心理的負荷をもっているかということを探索するのが本研究の目的であった。その探索は二つの関心を主に含んでいた。一つは，記述内容の分類カテゴリーによって示される自己の諸側面と心理的負荷との関連である。それは例えば「社会繋留的反応」と「自己叙述的反応」ではどちらの方がより重い心理的負荷をもつかという問題を含んでいる。もうひとつは反応の出現順位と心理的負荷との関連である。それは例えば，心理的負荷の重い反応が先に出現するのか，それとも後に出現するのかといった問題を含んでいる。本研究の結果は，それらの問題に充分な解答を与えるまでにはいたらなかったが，今後こうした問題を究明してゆく際の考察に供するべき若干の資料を提供した。

まず反応内容と心理的負荷との関連について考察したい。この点に関する本研究の主要な結果を概括すると，反応内容の二大分類カテゴリーをなす「社会繋留的反応」と「自己叙述的反応」とを比較すれば，後者は一般に前者よりも重い心理的負荷をもち，よりしばしば意識され，自己イメージの構成により本質的で不可欠の部分を荷負っているということができる。

他方，Kuhn, et al (1954) は逆に「社会繋留的反応」こそが自己構造のより本質的な部分であると述べている。だが両者はただちに矛盾を意味するわけではない。Kuhn らによれば，TST への反応の際に何がまず出現するかは，とりもなおさずその人間がある事態に反応する際にまず何に準拠するかを反映している。そこで TST に自己を社会的役割に準拠させる反応がまず出現するならば，それは彼が日頃の行動の際に，まずもっぱら社会的役割に準拠して行動するというパターンをもっていることのあらわれである。TST において「社会繋留的反応」がまず先行して出現するという一般的傾向は，人々の反応がまずもっぱら社会や集団的な背景に準拠してなされるという一般的傾向をもつということを示すものであり，その意味において，一般に「社会繋留的反応」が自己のより本質的部分であると考えられる。すなわち「社会繋留的反応」の TST における先行出現は，反応の際に自己をまずもっぱら社会や集団的背景に準拠させるという，人間の行動や態度の中に実在する本質的傾向を示すものである。

他方，本研究で「自己叙述的反応」がより本質的で重要であるというとき，それは「自己叙述的反応」がまず先行出現するということではない。「自己叙述的反応」において，「しばしば意識され」「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」等の心理的負荷が重いということである。それは各人の主観にあらわれた限りでの自己における重要性を意味する。例えば「勇敢である」ということが，しばしば意識され，それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまうというとき，それはその人の主観にあらわれた自分のイメージないし自分らしさにとって本質的

であり，なくてはならぬ重要なものであるということであり，それがすぐに後の実際の行動パターンを決定する本質的なものであるということを意味するわけではない。

さて考察を先に進めるために，反応の出現順位と心理的負荷との関連についての研究の結果を考慮にいれたい。結果は「非常に強く行動に影響する」とされる反応は，1の領域に多く出現し，「ほとんど意識されない」反応は前半に多く出現し，「そうでありたくない」反応は後半に多く出現するということを示した。

こうした結果は何を意味するのか。まず考えられることは，「非常に強く行動に影響する」の割合の最も高かった①類の反応が1の領域に多く分布すること，「ほとんど意識されない」の割合の最も高かった①類②類の反応が前半に多く分布すること，「そうでありたくない」の割合の最も高かった④類の反応が後半に多く分布することから，こうした反応内容の出現傾向にのっかって心理的負荷の出現傾向が決定されているのではないかということである。もしそうであれば，反応の心理的負荷がその反応の出現順位を決定するのではなく，反応の内容がその反応の出現順位を決定するということを意味する。すなわち TST への反応の出現パターンは，自己をまず社会や集団的背景に準拠づけて反応するか，あるいは好みや関心や性格に準拠して反応するかといった実際の行動レベルのパターンの反映であり，意識レベルの心理的負荷のパターンを反映するものではないということが考えられる。もし仮に反応の心理的負荷が反応の出現順位を決定するものであれば，例えば「しばしば意識される」反応は早くあらわれ前半に多く出現してもよさそうなものである。結果はむしろ逆に「ほとんど意識されない」反応が前半に多く出現している。このことはやはり，心理的負荷が出現順位を決定する主要な要因ではないことを示すものではなかろうか。だがそれにしても，反応の心理的負荷がまったく，記述時のプロセスに反映しないということは考えられない。ではどこに反映しているのだろうか。この問への考察にひとつの資料を提供するものは，「スラスラ出てきた」反応の中に，「非常に強く行動に影響する」「しばしば意識される」「それをとってしまえば自分らしさがくずれてしまう」「そうでありつづけたい」とされる反応が多くの割合を占めるという結果である。ある反応がスラスラ出てきたか，相当考えて出てきたかという事実は，反応が何番目に出てきたかという事実とは相互に関係しあう面をもつが，互いに相異なるレベルの事実である。後者は「私は誰だろうか」という問に対して20個の解答を与えてゆくという課題を遂行する大きなプロセス上の事実であり，前者はその大きなプロセスを具体的に1コマ1コマ実現してゆく小さなプロセス上の事実である。反応の心理的負荷は主にこの小さなプロセスにかかわる条件であり，先に Kuhn の考えとして述べた反応パターンが主に大きなプロセスにかかわる条件であると考えられうる。

だが，こうした考えはまだ仮説の域にとどまるものであって，これとはまったく違った考え方が成立つ余地がある。それは例えば，TST には自分にとってあたりさわりのない反応からまず出現する，しかるのち徐々に自己関与の度合の強い反応が現われてくるという考え方である。そうした考え方によれば「社会繋留的反応」がまず出現するのは，それが，特殊な意味合をもたな

い一般的な事項であり，したがって自己を露呈する危険性の少ないものであるからだと考えられる。又そうした考え方からすれば，日項ほとんど意識されない反応が先に現われるのは，意識されないのは自己関与の度合が低いゆえであり，したがってそれが早く現われたのだと説明されうる。その場合，反応の心理的負荷が出現順位にかかわる条件となる。いずれが正しいのか，それを充分に明らかにするためには今後の研究をまたぬばならない。

## 参 考 文 献

Bugental, J. F. T. & Zelen, S. L.: Investigations into the 'self-concept' I. The W-A-Y technique. J. Personality, 1950, 18, 483–398.

星野命：自己態度 (Self-Attitudes) の比較的研究（その１）――つの方法の検討―，日本心理学会第22回大会発表論文集，1958，324-325.

菊池登紀子：青年期における自己観〔Ｉ〕―私立女子校生における発達的様相―，岩手大学教育学部研究年報，1970，30，4, 57-74.

国際基督教大学教育研究所教育心理研究室編：二十答法による自己態度の研究手引，1961.

Kuhn, M. H. & Mcpartland, T. S.: An empirical investigation of self-attitudes. Amer. sociol. Rev., 1954, 19, 68–76.

Lazard, D. (Trans. by J. S. Bruner): Two years under an assumed name. J. abnom. soc. Psychol., 1946, 41, 161–168.

西村春夫・星野命：自己態度の記述の心理的負荷について・科警研報告，防少編，1964，5，1，13-27.